

文書伝道者としての山本泰次郎先生

ちょうど三年前の本誌に、私は「『山本泰次郎聖書講義双書』について」という文を寄せた。今また求められて、その著者山本泰次郎先生追悼の文を書かなければならなくなった。先生は去る三月二十六日、心筋梗塞のため七十九年の生涯を閉じられた。

山本先生は若くして内村鑑三に師事し、内村から学んだ福音的キリスト教の信仰に生きぬかれた。そして内村の没後、農商務省技官の職を辞して独立伝道に立たれ、一九三四年九月に月刊誌『聖書講義』を創刊、以来四十余年間これに拠って福音宣伝に従事された。

伝道者としての山本先生の本領は、その文筆伝道にあった。これは前回の寄稿にも引用したが、先生は『双書』の刊行にあたって次のように言っておられる。

日本伝道の方法いかんは、実に重大な問題です。著者はあらゆる観点からして、文書伝道、特に聖書を注解して提供することこそ、日本伝道として最善である、いな唯一の道であると信じて、今日までそのために、すべてを忘れ、すべてをささげて来ました。

「文書伝道が日本伝道の唯一の道である」と信じた先生は、ご家族を中心とする日曜の集まりのほかは、地方出張伝道はおろか講演さえもほとんどなさらずに、ただひたすら一本のペンに、その聖書研究と

伝道生活のすべてを託されたのである。この点で先生は、文書伝道者の多い無教会の中でも、最も徹底しておられたと思う。

徹底していると言えば、先生はあらゆる点で徹底しておられた。特に「聖書を注解して提供すること」においてそうであった。先生の伝道誌『聖書講義』は、先生のご遺志により、四月号の四〇五号をもって廃刊になったが、この雑誌はその名の通り徹底して聖書講義の雑誌であった。巻頭言と末尾の日誌のほかは、すべてが聖書そのものの注解であった。その巻頭言、日誌といえども、それぞれが先生の聖書研究の凝縮であり、その日常への適用であったのである。先生は自ら言われたように、確かに「聖書キリスト教を信じる聖書信者」であられた。

先生の聖書講義がどのようなものであったかについては、すでに前回の一文に述べたので繰り返さないが、ただ一つだけ、先生が「聖書を注解して提供する」その仕方についても、心を用いておられたことを付言しておきたい。先生の聖書講義は、そのほとんどがいわゆるランニング・コメンタリーの形をとっているが、中には『ダビデ伝』のように、その刊行当時ある著名な旧約学者から「出るのが五十年早かった」と評されたような学問的注解もある。『使徒行伝の研究』などもそれであろう。また、これは残念ながら完結を見なかったが、恐らく日本では他に類例のない独特な注解書と言うべき『脚注新約聖書』（教

文館)のような試みもある。先生は物事すべてにおいて内容第一で外形には無頓着であられたが、こと聖書注解の形については、このように最後までいろいろと工夫しておられた。一に先生の熾烈な伝道心と、読者に対する深い愛のしからしめるところであった。

聖書注解以外のことは何もしなさらなかった先生の唯一の例外は、恩師内村鑑三について書くことであつた。かくして内村全集の編集は、先生の文書伝道のもう一つの大きな事業となつた。先生はその晩年に前後約十年間、この仕事に心血を注がれたのである。

教文館の委嘱によって先生が編集されたこの全集は、岩波版内村全集を改編して、『内村鑑三聖書注解・信仰著作・日記書簡・英文著作各全集』全五十七巻としたもので、内村の全著作を項目別に分類し、さらにそれを体系的に配列して、内村のキリスト教を一望のもとに収め得るようにした壮大な編集である。また内村の著作の着きかえを初めて採用し、総索引を付するなど、先生の聖書講義に見られると同じ伝道的配慮がすみずみにまで行き届いている。

そして先生は、この歴大な全集の一巻一巻に詳細な解説を執筆された。それは集めれば、それだけで一巻の大内村論になるものだが、先生はそのほかに『内村鑑三の根本問題』(教文館)、『内村鑑三―信仰・

生涯・友情』(東海大学出版会)、『内村鑑三論集』(『双書』別巻、キリスト教図書出版社)などを上梓しておられる。恐らく先生は、内村

について最も多く語った人のひとりであろう。先生の内村論は、弟子としての偏りをまぬがれないかも知れないが、その偉大さのゆえに、なお群盲象を撫でる類いの内村評が多い中で、どこまでも内村のキリスト教とその信仰の本質を明らかにすることに固執した内村論として、今後長く読まれることになるであろう。

山本先生が無教会の中でも、いささか特異な立場に立っておられたことは知る人ぞ知る。その先生の信仰の本質を論ずるには、私は非力に過ぎるし、なお時を要しよう。ここでは以上先生の伝道事業の一端を紹介して、私の責めをふさぎたいと思う。自ら掲げられた「聖書を国民の書に、国民を聖書の民に」の理想に、その生涯を捧げられた山本先生の霊の、主のみ許に在って安からんことを祈りつつ。

(所載) 「本のひろば」一九七九年六月号